剱岳八ッ峰六峰 B フェース・正面ルート（京府大ルート）

日時：1962 年 8 月 3 日

メンバー：井川 裕、高田 直樹（OB）

概要：剱岳八ッ峰六峰は難易さまざまなルートをクライマーに提供し、剱岳における岩登りの対象としては最もポピュラーである。このように多くのクライマーに親しまれ、夏期には非常な賑わいをみせる六峰のフェイス群のなかにあって、B フェイスは A、C 両フェイスに挟まれ、一段と奥に収まり、クライマーから忘れられたような存在である。

六峰の他のフェイスに多くのルートが拓かれ、ルートファインディングが容易くなった現在、B フェイスは新鮮な岩登りを味あわせてくれる六峰における唯一の壁である。

B フェイスは高距こそ 100 メートル余りであるが、上から下まで圧倒的な垂壁であり、逆層気味の壁は最上部にオーバーハングを有している。正面ルートはリスやホールドに乏しく高度な技術を要求される。

現在もっとも多く登られているルートは、正面の壁を避けて左のリッジ通しのものである。

この壁のルートは、まず 1952 年京大山岳部の中島道郎氏によって、リッジルートが拓かれた。

わが部の B フェイスにおける登攀は小川真司・林三郎氏によるリッジルート（1956 年 7 月 23 日）と高田直樹・林修氏による正面ルート開拓（1960 年 8 月 3 日）の記録がある。今回のルートは壁中央から左方リッジに連なる這松帯草付部をさけ、高田・林の正面ルートより更に右にルートを取り、壁最上部のオーバーハングに直上するルートを拓いたものである。

この記録は、折からの台風接近のため、かなりの強風のもとでの登攀であった。このとき、A フェースの登攀を終えたベルニナ山岳会のパーティーが眼前の登攀を見守っており、正面から見た登攀の模様がより困難に受け取られて後にガイドブックに「困難なルート」と紹介されたと思われる。

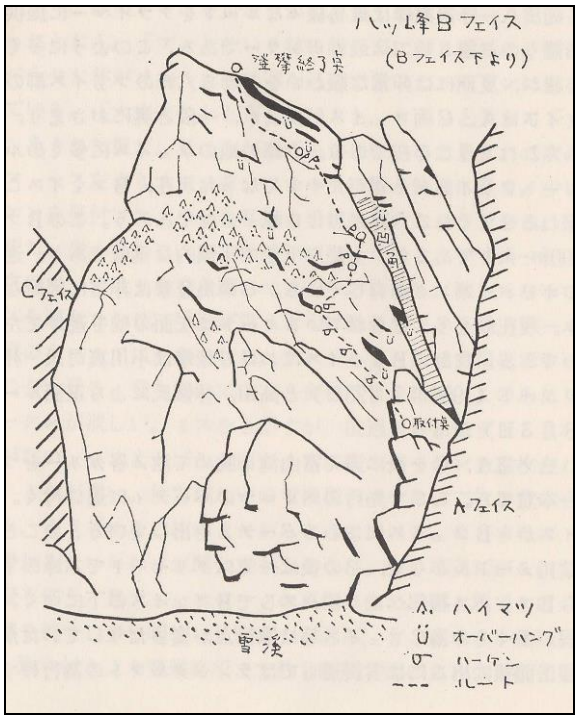
記録

1962 年 8 月 3 日　晴のち曇　風強し

三ノ窓 AC 発（6:30）－池ノ谷ガリー－八ッ峰六峰下（8:00）－B フェイス取り付き（8:30）－B フェイス登攀終了点（11:45）－剱岳頂上－三ノ窓 AC 着（15:00）

三ノ窓 AC を後に遠く富山湾を眺めて池ノ谷ガリーをつめ、池ノ谷コルで一本立てる。ここで先行のベルニナ山岳会のパーティに追いつく。彼らも今日、A フェイスから B フェイスに廻るパーティを出しているとのことである。

池ノ谷コルから数 10 メートル下り、その後は一気にグリセードで六峰の下へ飛ばす。そこから B フェイス基部へトラバースして B フェイスの下に着いた。今年は例年より残雪が多く、C フェイス等は取付き点が変わったりしていたが、B フェイスも同様で、正面壁に出るには雪渓通しではラントクルフトのため行けず、いったん C フェイスより B フェイ



剱岳八ッ峰六峰 B フェイス登攀ルート図

スの基部を捲いてA、Bフェイス間のルンゼに入る。この捲きが土砂の乗った外傾した基岩で悪く、緊張を強いられた。ルンゼから仰ぐBフェイスは一枚のスラブのようであり、上部にハングが連続しているのが望まれる。先日 A フェイスを登ったメンバーの話によれば、B フェイスは縦のリスが多いとのことであったが、実際に見てみるとそんなことはない。壁の中間に這松のバンドが走っており、そこまで直上し、その上から少し右よりにハングを逃げれば登れそうである。台風接近のため、雲行きの早い空を見上げてルートを確認し、登攀を開始する。

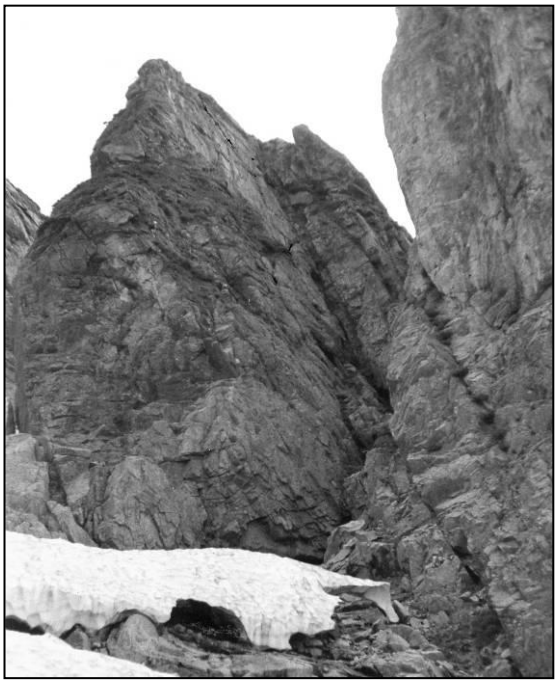
40 メートルをドッペルに使う。最初のピッチはトップ井川で洞窟状ハングの下を左に抜けて、一枚岩の凹面状になったところに出る。ここは良いリスがなく、やっと 1 本ハーケンを打ってビブラムのフリクションを効かせてこす。ここでゼルブストザイルを使用していないためザイルの手持ちが少なくなり、予定していた這松バンドで確保することは無理となる。そこで這松バンドの下にある、潅木の生えた小さな外傾スタンスに登りハーケンビレイをする。

ラストの高田は早いピッチでこのスタンスに到達し、這松バンドから伸びるブッシュを抱き込んで右へトラバースし、ブッシュを越えて 5 メートル程いったバンドで確保する。後の井川はブッシュに振られ冷や汗を掻く。そのままツルベで井川がトップに立ち、バンドの上に続くフェイスを登る。

このピッチはホールドが多く快適な登攀である。このフェイスを越えると外傾した幅広いバンドに出る。このあたりより風がいっそう強くなり、たびたび帽子を飛ばされそうになる。このバンドではビレイピンを打つリスが見つからず手間取った。丁度、長次郎雪渓を挟んで熊ノ岩を登攀中の林(修)・岩佐の姿がスカイラインに浮かび素晴らしい眺めである。互いにコールをかけて励ましあう。

4ピッチ目は高田トップで、真上にふさがるハングへ直上する。ホールド、リスが次第に乏しくなり、強風の中での登攀はますます困難の度を加える。高田、ハーケンを叩き込んでアブミをセットしハングに乗り出すが、ホールドなく暫く思案の末、フリクションのみで突破しその上の狭いレッジに出る。ここでハーケン 2 本打ってハーケンビレイの態勢をとるがハーケン歌わず心細い。

井川はハーケンを回収しながら高田のもとへ。真上は完全にハング帯で蔽われている。ルートはハング帯の切れ目を狙って左上するしかない。この狭いレッジで高田を抱きこむようなすれ違いをして、井川はそのままトップに出る。レッジより左に登るこのピッチは、有効なホールドがなく、プッシュホールドによる体の持ち上げで、断続的に襲ってくる強風のためバランス保持が難しく、最も困難なピッチであった。

ここを過ぎてハング帯の切れ目に突き上げる凹角に入り、浮石をだましながら登ればやがて這松に入り、登攀終了点の B フェイス上に出た。ビレイピンを打ちカラビナをかけて、ゆっくりザイルを手繰る。高田は浮石を避けて、凹角の右側を登ってくる。

B フェイス登攀終了点で固い握手。手垢に汚れていない新しいルートの開拓に、充実感と喜びに自然と笑いがこみ上げてくる。二人は風を避けて岩陰に行き、後立山の峰々を眺めながらザックから昼食をとりだした。　　(記／井川 裕)